

リーダーシップとマネジメント実践 エビデンスに基づいた安全な看護実践を目指した学習の取り組み

森崎 美沙（西入院棟 8階）

I はじめに

8 西病棟は一昨年の再編成によりスタッフの半数が入れ替わることとなり、呼吸器疾患をみたことのない看護師が増えた。経験不足から呼吸器疾患に対する苦手意識を持った看護師も多かったが、2年間を通して少しずつ勉強会の実施や患者さんの看護を行うことで徐々に呼吸器疾患への知識を持った看護を行うことが出来るようになった。本年度の病棟目標の中に「患者を生活者と捉えエビデンスに基づいた安全な看護を実践する」という目標を掲げており、病棟全体で呼吸器疾患に対して知識を持った看護を行っていきたいと考えている。そこで、スタッフ全員で目標に向かって業務に取り組む必要があると考えた。

II 問題・課題

本年度はスタッフの 1/3 が新しいメンバーとなり、特に新人看護師が 6 名と多い状況となった。病棟全体で 4 年目以下の看護師が 1/2 を占めており、知識不足や苦手意識がまだまだ大きいように感じる。また、PNS で患者さんを看ている、特に若い看護師は現象だけを捉える傾向にありアセスメントが不足している状況にあることと、先輩看護師とペアを組むことで安心感があり、自己学習を行う意欲が少ないと感じる。このことから、フィジカルアセスメントの視点を持った看護を行えていない。学習範囲が絞り込めず、効果的な学習や学習方法が分からない。病棟に呼吸機器を装着した患者が継続して入院していないため、呼吸機器管理に対して継続した知識の維持ができず苦手意識がある。スタッフの入れ替わりが多く、マニュアルの周知・徹底が出来ていない。といった問題があると考えた。そのため、効果的な学習が出

来るような場を提供していき、スタッフの学習の振り返りや、マニュアルの中で周知できていない部分を把握していき徹底していく必要がある。またベッドサイドでアセスメントを共有する場をもつことで、フィジカルアセスメントの視点を養うことができると考えた。

III 目標

1、呼吸器疾患に対してフィジカルアセスメントの視点から患者をみることができアセスメント強化につながる

1) ベッドサイドでのアセスメント共有の場や学習会で意見を出すことが出来る

2) アセスメントの視点を PNS を通してペアで共有することができる

2、呼吸機器の学習を行うことで安全で的確な呼吸管理方法の選択と実践が行える

1) 学習会参加 100% を目指し学習意欲の向上ができる

2) 新人が呼吸機器の取り扱いについて助言を受けながら主体的に呼吸管理の方法やケア方法を考えることができる

IV 実施

学習会の年間計画をたて 5 月より取り組みを開始した。前期は新人を対象に学習会の計画を立て、5 月の早い段階で新人が安全な酸素の取り扱いを選択・実施できるよう酸素療法についての学習会を実施した。資料作成と学習会の実施は 2 年目看護師に行ってもらい、学習会の意図を伝え新人への指導を意識してもらい、2 年目看護師にとっても復習の機会とする場になるように設定を行った。新人は全員参加で学習会を実施することができ、病棟内にある酸素物品の使用法や選択の仕方について学習が

できたという声が聞かれた。また、特に酸素ボンベの取り扱いについては、業務の中で実践できていない看護師が多く、取り扱い方法も分かっていなかったため、実際にボンベ交換を実施してもらうことで、安全な取り扱い方法を学習することができ、その後の業務に生かすことができていた。次に9月に胸腔ドレーンの看護について学習会を実施した。5月同様、新人を対象とした学習会の計画で、実施は3年目看護師に行ってもらい、指導と復習の機会とした。9月までの間に胸腔ドレーンを挿入した患者は多数いたため、実際の業務の中で受け持ち患者を通してドレーン挿入中の観察や看護については実施を行っていた。しかし、学習会の中で観察の根拠やリスクなどについて考えてもらう時間を作ったところ、そこまでを考えられていない新人が多いことが分かった。学習会を実施した3年目スタッフはこれまでの自己学習と経験により、根拠やリスクについても理解できており、今回の実施で改めて復習となり、不足していた情報の追加ができたという声が聞かれた。2回の学習会を通して、新人看護師にアンケートをとったところ、それぞれの学習会の内容については理解することができ、その後の業務に生かすことが出来ていることが分かった。学習会実施までに、それぞれの項目について自己学習が出来ていたかという質問については、あまり出来ていなかったという意見が多く、患者を通して観察点などの学習は行っていたものの、根拠やリスクを含めた観察ができていなかったことが分かり、学習会の中でその必要性について伝えることができた。2回の学習会を通して新人の現状については、他スタッフにも理解してもらうことが必要であり、PNSを通してアセスメントの補完や安全で的確な呼吸機器の選択や看護ケアの実施が出来るようにしていく必要があると感じた。学習会での意見や質問を通して気づいたことを、各チームリーダーを通して、主に夜勤リーダーを行う中堅看護師に伝え、PNSを通してOJTの促進と、エビデンスに基づいた安全な看護実践につなげることが出来るよう周知を行った。また、10月の病棟中間評価のなかで病棟に必要な学習会の促進ともしっかり自己学習の啓発が必要という意見がでたため、今回のリーダーシップ研修での取り組み内容について病棟全体に伝え、後期に向けての学習会の予定や自己学習計画について発信を行った。

10月はナーシングスキルでの自己学習をスタッフ全員に実施してもらった。冬季に向け

て病棟に入ってくる患者を意識してもらい、患者を受け持つ前に人工呼吸器とNPPVについての基礎的内容の復習を行ってもらった。病棟中間評価で自己学習の促進について説明を行っていたことで、スタッフ全員が意識的にナーシングスキルでの学習に取り組むことが出来ていた。テスト内容から、病棟全体で陽圧換気による全身状態の変化や、NPPVマスク・挿管管理中のケア方法について知識不足していることを把握することができたため、その内容について管理補佐と情報共有を行った。11月後半にはNPPVを装着した患者が入ったため、ベッドサイドで全身状態の観察点やアセスメント、マスクフィッティングの留意点について共有を行った。NPPVを装着した患者が病棟に入るのは久しぶりであったため、スタッフが危機感をもってその場に参加することができていた。また、ナーシングスキルでの自己学習があったため基礎知識をもってスタッフが共有の場に参加することができており、ケア方法について質問が出たりし、復習と情報の追加の場となることができていた。11月は急変時対応をスタッフ全員に実施した。昨年、急変時シミュレーションを開催していたため、本年度はBLS更新研修の中で急変時対応について行った。急変対応はほとんどのスタッフが経験したことがないため、シミュレーションの中でイメージしてもらい、実際に急変が起きたときにどう対応するか学習することができていた。スタッフの意見からも、実際に急変に当たったときにどう対応するのか繰り返し行っていく必要があることが分かった。実施計画では挿管介助についても予定していたが、学習会の様子を見て全て行うよりも、内容を分けて実施することでスタッフがより技術修得ができると判断し1月～2月に実施できるように計画を変更した。

IV 今後の課題

5月から11月に行ってきた内容から、呼吸機器を装着した患者が病棟に入ってきた場合、安全な看護実践ができるよう、アセスメントやケアを共有出来る場を作り、PNSを通してその内容を実践できるよう働きかけていくことが今後も必要であることが分かった。また、病棟に必要な学習会を今後も検討していき知識・技術の向上を図り、個人の学習意欲の向上につなげていく必要もある。新人を対象にした学習会では、学習会を通して気づいた現状を他スタッフに情報提供し、OJTの促進で新人自

らが呼吸管理の方法やケア方法を考えて選択できるように働きかけを行った。今後もスタッフ全員で OJT の促進ができるよう情報発信していく必要があると考える。今後もスタッフの意見や病棟の現状をみながら取り組みを継続していく必要がある。

V まとめ

研修参加前は、リーダーシップをとるということに苦手意識があり、リーダー業務や自分で何かを発信していくということにかなり消極的だった。今回の研修を通して、やらされているのではなく、自分が何をやりたいのか、病棟にどうなってほしいのかという軸を明確にすることの必要性を学ぶことができた。新人だけでなく病棟スタッフ全員でアセスメントの視点を持った看護を行うことが重要であると改めて感じた。目的や方法を発信することで、スタッフにもなぜ必要があるのかということ意識してもらうことができ、取り組み参加へとつながっていったと考えられる。まだまだ自分の弱みとして発信していくことというのは苦手意識が残っているが、今回の研修で得た病棟の変化やスタッフの意識変化をもとに今後もリーダーシップを発揮してよりより病棟となるよう還元していきたい。